町長コラム

町長室からこんにちは

No.64

一宮町長
馬淵 昌也

9月9日以来一宮町ではコロナの新規陽性者数は0です。このまま終息に向かって欲しいものですが、イギリスやロシアでの激増を見ると、そう簡単ではないでしょう。これから冬に向かって、さらに警戒を強めてゆかなければなりません。

さて、長く続くコロナ感染症によって、私たちの生活は様々な負の影響を受けました。気分的にも暗くなりがちです。そこで今回は、コロナの影響の中からあえて積極的に評価できるものを見つけてみようと思います。

先日、一宮中学校のやまゆり祭に伺いました。そこでは、コロナのため、例年の柱である合唱コンクールが中止になっていました。しかし、それに対応して、生徒諸君の努力で、例年になくユニークな、新たなやまゆり祭が展開されていました。読書感想文や英語発表などの個人の発表、ダンスや寸劇、吹奏楽の演奏、ボディーパーカッションや巨大モザイク画製作など多彩な集団的パフォーマンスと、どれも大変面白く印象深いものでした。これは、コロナによって、先例の継承ができなくなり、結果的に大変独自なものに展開した新たなやまゆり祭の形でした。今後のやまゆり祭は、以前の形式と新しい形式、両方を選ぶことができるようになりました。これは、思わぬコロナの積極的な置き土産ということも可能でしょう。

また、コロナによってオンライン学習の必要性も高まり、文部科学省は、国の予算を増額して、一人一台のタブレット形パソコンの整備を可能にしました。これは、現在の日本の教育における最大の課題である、教育現場のICT化において、決定的に大きな前進です。これも、コロナによるプラス面の置き土産の一つといえます。

さらに、保育園や公民館などでは、コロナ感染の拡大を防ぐ目的から、お手洗いの洋式化や、水道の蛇口の自動化も進めることができました。これも、コロナが終わったあとも、その恩恵を受けることのできるものです。

これから、コロナがどうなるか、いまひとつ不分明ですが、コロナによって、手に入ったもの、生み出されたものもあることも事実です。ポストコロナに向けて、そうしたコロナの予期せぬ置き土産も大切にして、先へ進んでゆきたいものです。